

記紀の五世紀以前の天皇系譜作製過程試論

奥 田 尚

A Study on the Process of Making the Genealogy of Emperors before the 5th Century in Kojiki And Nihonshoki

Hisashi Okuda

はじめに

第二六代継体より前の天皇については、記紀が主史料であることはいうまでもない。継体の即位は紀では五〇七年とされており、それより前の二五人の天皇群は五世紀以前ということになる。これら二五人の天皇群がどのようにして記紀に定着するのかということについては、ほとんど問題とされなかった。記紀の歴代天皇がどのような構成を持たされているかについては、水野祐の研究が基本的なもので、それを体系的に批判した前之園亮一の研究が目立ったものであるといってもよい。

水野の業績は高い評価を受けているが、その根拠となる論理は意外に貧弱である。水野の画期的な研究方法のひとつに、和風諡号（死者におくる日本風の名）の研究がある。たとえば第二三代

成務の和風諡号はワカタラシヒコというが、これは六四一年死去の第三五代舒明の諡号のオキナガタラシヒヒロムカなどの「タラシ」から発想されたなどと水野は解釈した。この水野の解釈は正しいが、不思議なことに水野は、成務を実在する天皇とみている。どうして水野が成務は実在するものかといえば、記の成務には崩年干支（死去年を干支で表わしたもの）が記されているという理由による。

第二四代仁賢の紀の分注は「自余の諸天皇は諱の字を言わず。しかるに此の天皇に至りて、独り自から書くは、旧本によるのみ」とあり、仁賢以外の諱（生前の実名）は伝わらなかったことがわかり（紀はこう記しながら神武の諱をも記す）、成務も諱は伝わらなかったから、成務の名は後世に付けられたワカタラシヒコしかない。水野は継体以前の和風諡号はすべて後世のものとす

るが、紀が諱は仁賢以外に伝わっていないというのだから、継体

以前の和風諡号をすべて後世のものとすると、名のない天皇が二人いたことになる。名がないことは、個体の識別ができないこととであり、個体の識別ができないのに死去年を付すことなど出来よう筈はなく、崩年干支による実在の論理には根拠がない。

記紀の天皇の和風諡号といわれるものは、記紀の物語にも登場する実名風の要素もあり、実は諡号か諱か判別できない。本稿では両方の意味を含ませて、名あるいは名前などと記すが、五世紀以前の天皇の名は以上のように、極めて不確実なものといえる。埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘が「ワカタケル大王」と一九七八年に判読され、記紀のオホハツセワカタケル（雄略）の名であることが発表されると、記紀の天皇名が実証されたとみなされた。鉄剣銘のワカタケルが雄略であることは通説とはいえ、批判できないものではない。³⁾

前之園の研究では、六世紀中葉に成立した「帝紀」「旧辞」は、その時期の貴族の歴史観により作られた虚構で、神武から応神までの天皇群は実在しないとす。その貴族の歴史観というのは、神代・中ツ代・人代（仮の人代と真の人代から成る）という時間的・空間的区分観であるという。前之園のこの構想は十分に評価に値するが、人代すなわち仁徳以降の天皇群には実在の人物の投影がみられるとする点に疑問が残る。前之園は、稲荷山鉄剣銘の「ワカタケル大王」を雄略に当てており、これと「帝紀」「旧辞」の六世紀中葉成立説を支持することが、人代の天皇群の実在の主張につながっているようである。

「ワカタケル大王」については上に触れたが、「帝紀」「旧辞」の六世紀中葉成立説はかつて筆者もこれを支持したことがある。しかし、これは自己批判の必要がある。六世紀中葉に支配者群の代表的人物（たとえば大王のような存在）を念頭に置いて、それと自己の系譜を結合させる試みや、それにまつわる物語を創作する試みは、あった可能性を完全には否定できないかもしれない。たとえそう仮定しても、それらと記紀の天皇系譜と物語は、峻別する必要がある。記紀は万世一系の天皇像のもとに、それらを吸収し改変したのであり、本来のそれらの姿は記紀からはまったくうかがえないと考えるべきである。六世紀中葉に成立したそれらは、各氏族の出自と業績を誇るものであり、代表支配者の系譜や業績を誇るものではない。天武朝の史局でそれらの代表支配者を、万世一系の天皇群に配した時、それらが持っていた性格は、完全に息の根をとめられた。前之園のいう古代貴族の歴史観は、六世紀中葉のものではなく、七世紀末・八世紀初頭の記紀の歴史観とすべきであろう。

文献に基づく記紀の研究に大きな衝撃を与えたのは、一九六〇年代後半以降の日本史研究会のいわゆる「大化改新」否定論の提起といえる。紀は七世紀中葉の記述でさえ不確実であり、政治的編纂物の性格を強く持つという分析視角が提起された。改新否定論には賛否両論あるものの、この分析視角の提起は大きな意味を持った。しかし、否定論は七世紀中葉という文字の使用が定着した段階を対象としており、それだけに具体的な実証の側面では結

局は、天智朝や天武朝の史実を後にまとめて六四六年の改新詔を作り出したという論理の成立の可能性があることを提起したという枠内にとどまった。記紀のあれこれの記事を、後世の史実のあれこれの反映であるとみる方法は、五世紀以前の記紀の研究にはいわば常識的に用いられる方法ともいえる。星野良作の『研究史・神武天皇』には、一九三五年の肥後和男の崇神以後の大和朝廷の発展が神武像に投影されたという見解を紹介している例をあげておきたい。³⁾

方法論の観点のみで改新否定論を捉えれば、記紀の五世紀以前の研究に用いられた方法を、七世紀中葉に適用したともいえる。しかし記紀研究の方法論の観点からいえば、改新否定論が提起した紀を一個の政治的編纂物とみる視角は、実は改新否定論が現実にあげた成果の方法論を越える内容を含みうる。徹底して記紀を政治的編纂物とみなせば、記紀の記事はすべて机上で史実の根拠なしに造作されたという論理が浮かび上がる。もちろん改新否定論が対象とした七世紀中葉には、この論理は適用できない。なぜなら、七世紀中葉には文字の使用は既に始まっており、現在の時点でも出土木簡などから七世紀の終わり頃の歴史は知ることができるし、記紀の編纂時点の八世紀初頭には七世紀中葉についてのかんりの資料は残されていたと推定でき、紀はそれらを無視して机上の空想を記すことは不可能だったと想定してよいからである。文字使用の一般化がいつからであるかは、解明の困難な問題で、『隋書』倭国伝は仏教を百済から導入すると同時に文字の使用を

知ったとする。文字の使用が一般化するかどうかは、文化全体の発展段階と大きな関連があると考えられるから、古墳からは特例を除いて文字資料が発見できないのが現状であり、それを考慮すれば仏教文化の導入以降に文字使用が一般化するとみてよからう。中国資料を全面信頼するのは問題であるが、以上のように考えれば、やはり文字使用の一般化は、仏教文化とともにあるとみてよい。仏教文化の導入の時期にも問題があるが、五三〇年代から五七〇年代初頭までの欽明朝とみて大過なからう。

仏教には祖先の供養という思想があり、祖先の記録が文字で書かれるのは早い時期が予想される。欽明の父は継体であるが、継体の名前程度は記録に残されたかもしれない。しかし継体は応神の五世孫とあり、直接に前天皇武烈の血を引かない。血を引かない天皇の記録まで残された可能性は少なく、武烈以前の天皇は文字記録がなかったといえる。文字がなくとも口伝えがあるというのも、武烈以前にはあまり信頼性がない。継体で天皇の直接の血統は途切れているのであり、もし口伝えなるものが残っていたとしても、それは継体の祖に関するものの可能性が高い。武烈以前には口伝えも文字記録もないとすれば、武烈以前の天皇については、記紀は机上の空想に基づいてしか物語を作ることができない。もう少し具体的に述べると、記が第三代推古天皇で記事が終るのは、推古以降は少なくとも天皇の系譜が朝廷に残されていたため、架空の記事を作る必要がなかったためと考えられる。従来は古い時代の記録が推古までで途切れたためとみたが、これは

記がなんらかの史実を反映していると無条件に考えた結果に過ぎない。机上の空想に基づくとすれば、逆に推古以降はあまり空想をする必要がなかったために、推古で記述を終えたといえる。

推古は欽明の娘であり、推古らの系譜を記す欽明紀には分注に「帝王本紀」という書があるが伝写の間に前後関係や兄弟関係が食い違っている、とある。これは紀の編纂された七世紀末から八世紀初頭にそうした状態になっていたというのであり、推古朝以降といえど系譜は整っていないことがわかる。また、系譜がだいたいの形であれ朝廷に残されるのが推古朝であることは、紀が推古の母のキタシヒメの同母妹にヲアネキミをあげるのに、記が欽明の系譜の部分でキタシヒメの姨(をば)としてヲエヒメをあげることにかがえる。

ヲエヒメの「エ」は兄の読みで、兄は同時に姉をも意味するから、ヲエでもヲアネでも同じことになる。ヲアネキミとヲエヒメは同一人物であるが、妹と「をば」では関係が異なる。「をば」には種々の意味があるが、ここでは欽明の妃であることからすれば、ヲエヒメⅡヲアネキミはキタシヒメの母の姉か妹という意味になる。血縁の関係が妹と「をば」では、まったく異なる。「をば」がヲエヒメⅡヲアネキミであるのは、キタシヒメの子供たちからみた場合で、彼らにとって母のキタシヒメの妹のヲエヒメⅡヲアネキミは「をば」となる。キタシヒメの子供には推古があり、推古からみてヲエヒメⅡヲアネキミが「をば」なのであり、推古を中心とした系譜の記録を紀は正しく理解して欽明の系譜に書き

改めたが、記は間違つて復元し欽明系譜としたといえる。

推古の系譜の記録は、以上のように推古からみた関係を記したものであるが、その記録に記されていた上限は父と母の世代であったことは、前引のように欽明紀に系譜の錯誤を記す分注のあることにかがえる。記紀の系譜は欽明の父の継体についても錯誤があるのに、継体記紀はそれにはなんの注記もしない。継体の系譜はなにか確実な記録に残されたものではなく、記紀の編纂段階で机上で造作されたために、錯誤を無視しているといえる。厳密に言えば継体の系譜もしたがって存在も、確実なものとはいえない。ただ、継体は架空の存在としても、存在の確実な欽明の父として空想されたのであり、武烈以前の架空性とは質を異にすることは確認できる。問題は武烈以前の架空の天皇群で、どのように彼らが作り出されたかが、本稿の課題である。

(一) 考察の準備

本論に入る前に、筆者は以上の認識に基づいて、応神・仁徳・履中・反正が架空の存在であることを論じた別稿を作製したので、その要旨を紹介しておく⁵⁾。

筆者のように記紀の五世紀以前の部分を完全な編纂物であり、一片の史実も投影していないとみる観点に立てば、ひとつの物語(仮にX物語)から順次主要天皇を生み出したことが予想される。初代天皇は天皇群の始祖であるから、このX物語の全容の大略は、まず初代天皇に投影されていると考えられる。初代天神神武は紀

に「諱はヒコホデミ」と記されており、ヒコホデミは神武の祖父の名と同一であり、祖父と神武は同一像から分派した二人物であるとの見解は既に発表されている。神武に投影されたX物語を抽出する際には、神武と祖父をまとめて考える必要がある。

祖父のホホデミは、天から降臨したアマテラスの孫ニギの子で、母は山神の娘である。母はニギに一夜で妊娠したことを疑われ、ニギの子なら焼け死ぬことはない、産室に火を放ってホホデミら三人の子を生む。ホホデミの名前は、「ヒコ」＝男の尊称・「ホホ」＝ほのほ(炎)・「デミ」＝出るという意味で、火中の出生の「炎」・「火」によって名が付けられている。他の二人の子の名も「火」にちなんでいる。火中出生をX物語の骨組みのひとつとみることができる。また「火」の性格をX物語の主人公のひとつの属性とすることもできる。ホホデミの兄は隼人の始祖であり、X物語には隼人がなんらかの形で関与する。

ホホデミは兄に借りた釣り針を失い、海底に探しに行く。海底では海神の娘が井戸に水を汲みにきて、水面に写ったホホデミの姿をみて、両親に貴人の到来を告げる。ホホデミは娘と結婚し、釣り針をえて、地上に戻る。水面に姿を現わすホホデミには水の精の性格があり、海神＝水神の一種の娘と結婚することにより、水の要素は強調される。X物語の主人公の属性の第二は、水の性格とみることができる。

ホホデミと海神の娘の間の子は、鵜の羽で葺いた産室で誕生する。鵜が子どもの誕生を助ける形であり、ホホデミのなかに鳥の

援助を受けるにふさわしい、鳥の性格が配されている。主人公の属性の第三は、鳥の性格と考えられる。

神武の事績のなかで最も強調されているのは、東征してヤマトへ入り、王者となることといえる。X物語の骨組みの他のひとつは、東征物語であるといえる。神武の最終の敵は、同じ天神の血統のニギハヤヒに味方する者であり、これは同族を倒して王者になったことを示す。東征物語には同族の打倒が含まれている。

まとめれば、X物語の主人公は、火・水・鳥の属性をもち、X物語の骨組みは火中出生と、同族を打倒して王者となる東征物語であり、隼人がなんらかの副次要素として配されたもの、と推定できる。

景行記のヤマトタケルは、東国遠征の途中の野の中で敵に放火されるが、無事に脱出する。これは火中出生の変形と考えられる。脱出の際に、向かえ火を放つが、これはタケルに火の性格が配されていることを示す。また東国遠征の場面で、水神の一種に妨害されるが、妃の犠牲により水神が静まる。妃はタケルのある意味では分身であり、タケルに水の性格を配したものといえる。

タケルは死後に白鳥に変身するが、鳥の要素の強調といえる。タケルは東国遠征以前に熊襲(隼人の同類)を制圧するが、その帰途に紀では瀬戸内の水神を制圧しており、東征物語の変形とすることができる。同族の打倒は、タケルの双子の兄をタケルが殺したとする記の記述にみえ、紀もそれを暗示する形となっている。タケルの物語はX物語の骨組みと主人公の要素を備えており、X

物語の投影とみることができる。

タケルより少し古い時代の垂仁記紀には、ホムツワケ説話が載せられている。ホムツワケは記に火中に誕生したとあり、紀に炎上する稲城から母の手により外へ出されたとある。紀の話も火中出生の変形と考えてよい。ホムツワケの名前は、「ホ」||火・「ムツ」||親しい・「ワケ」||尊称で、「火と親しいミコ（皇子）」の意味から命名されている。火の性格が配されていることは、いうまでもない。ホムツワケは言葉を発することがなかったが、白鳥をみて初めて言葉を話す。白鳥は、水と鳥の複合した要素で、ホムツワケには水・鳥の性格が配されている。記には水遊びの場面や、蛇の化身（蛇は水神）との結婚の話もあり、水の要素は疑えないが、紀にはこれらの話はない。まがりなりにも、ホムツワケには火中出生と、火・水・鳥の要素というX物語の一部分が配されている。

ホムツワケに欠けたX物語の部分は、ホムタワケ（応神）が持っている。ホムタワケの名前は、「ホ」||火・「ムタ」||共に（一緒に）・「ワケ」||尊称で、「火と一緒にミコ」という意味からなる。応神記紀には火の物語はないが、誕生地の九州からの帰途に、難波に留まっていた異母兄の反乱を受ける。これを打倒してヤマト入りを果たすのであり、東征物語そのものといえる。応神は日向から妃を迎えようとしており、日向は隼人の根拠地のひとつで、隼人の関与も配されている。

ホムツワケは記に「品牟都和氣」とあり、『上宮記』逸文は応

神に対応する人名を「凡牟都和氣」と表記する。「都」は「つ」とも「た」とも読め、ホムツワケとホムタワケは「都」一字の読み方の相違から作り出された二人物で、本来は同一人物といえる。記紀がX物語の要素を二人に配分したのは当然で、二人はもとは一人の主人公から作られたにすぎない。X物語は、王者にふさわしい物語であったために、主要な天皇に配分されたとすれば、ホムツワケは天皇ではないのだからにも配分する必要はない。ホムタワケにすべてを配分すればよいのに、天皇でもなく系譜上も直接の関係のないホムツワケに多くの部分を配分していることは、X物語が主要天皇に配分されたものではなく、X物語からホムタワケらが作り出されたことを証明する。

ホムタワケはイザサワケという別名を持つが、イザサの「サ」は神稲を意味する。イザサワケに似た名にイザホワケ（履中）があり、「ホ」は火であると同時に穂をも意味するので、イザサワケとイザホワケは深い関係にある。神武||ヒコホデミは、サノ尊という別名があり、これも「ホ」||穂と「サ」||神稲が対応している。「サ」と「ホ」が対応し別名でありうることは、イザサワケ（応神）とイザホワケ（履中）も別名である可能性を示す。

イザホワケの名前は、「イザ」||（いざ、と）誘う言葉・「ホ」||火・「ワケ」||尊称で、「火に誘う（誘われる）ミコ」の意味となる。「ホ」を中心とする名で、ホムツワケ||「火と親しいミコ」と酷似する。垂仁記にあったホムツワケの水遊びの記事（垂仁紀にはない）と、ほぼ同一の記事がイザホワケの記事として履

中紀にみえ（履中記にはない）、これからみてホムツワケとイザホワケは同一とみられる。

イザホワケ（履中）は弟のスミノエナカツミコの反乱を受け、宮殿に放火されたが、臣下に助け出される。火中出生の変形とみてよい。助け出されて履中は、難波から石上へ逃げるが、この過程は南方への迂回や、紀ではナカツミコの味方との遭遇があり、東征物語の縮小版といえる。反乱したナカツミコを打倒する役割は、さらに下の弟のミツハワケに割り振られる。ミツハワケは隼人を使って、ナカツミコを打倒する。水神を「ミツハノメカミ」・「ミツハノメ」といい、「ノ」は助詞の「の」で意味はなく、「メ」は女、「カミ」は神であり、「ミツハ」は水または水の精を意味する。ミツハワケは「水のミコ」の意味であり、イザホワケが「火のミコ」であることに対応する。鳥の要素はオホサザキ（仁徳）に割り当てられている。オホサザキの名は、「オホ」

「大」・「サザキ」はみそさざえという小鳥であり、同時にサザキは「陵」を意味する。陵を「ワケ」る（崩壊させる）ことになるので、サザキワケとは命名しなかった。

イザホワケ（履中）は火・ミツハワケ（反正）は水・オホサザキ（仁徳）は鳥が総合されて、X物語の主人公の属性を満たし、火中出生と同族の打倒を含む東征物語のX物語の骨組みを満たし、副次の隼人の関連をも満たす。仁徳・履中・反正は、X物語の主人公からその属性を分割して作り出されたものといえる。結局、X物語の主人公を軸としてみれば、ホホデミ神武ヤマトタケ

ルはホムツワケ・ホムタワケ（応神）はイザサワケ・イザホワケ（履中）・ミツハワケ（反正）・オホサザキ（仁徳）の等式がえられ、すべては架空の創作であるといえる。以上、別稿の要旨を紹介した。

(二) 雄略像の分析

X物語の主人公の属性は、火・水・鳥である。紙幅の関係で別稿では分析をしなかった雄略について、この三要素がどう現われるかをみておこう。まず、火の要素を雄略記からあげ、その特質を考えてみよう。

(ア) 雄略記 クサカ（地名）に住んでいたワカクサカベ王を訪問する途中に、雄略は志幾大県主が立派な家を構えているのを怒り、その家を焼こうとした。大県主がお詫びの品を贈ったので、焼くのをやめた。

(イ) 雄略即位前紀 安康を殺害したマヨワ王と、雄略に関連を疑われたサカイクロヒコは、ツブラ大臣の家に逃げこむ。雄略は二人を差し出せと命じるが、ツブラ大臣が拒否したので、その家に火をつけて三人を焼き殺した。

(ウ) 雄略紀二年七月条 百済のイケツヒメを妃にしようとしたが、イシカワタテと通じたので二人を焼き殺した。

(エ) 雄略紀一三年八月条 播磨国に強盗などの悪行をはたらくアヤシヨマロがいたが、雄略は臣下を派遣して、その家を焼かせた。ヨマロは巨大な白犬に化して火の中から出てきたが、臣下のひと

りが切り捨てると、犬はヲマロの姿にもどった。

上記の四史料に共通するのは、火を自在に操る雄略の姿である。記紀神話のヒコホデミは、母が自から火を放った産室から誕生する。垂仁記紀のホムツワケは、放火された稲城のなかで誕生する。景行記紀のヤマトタケルは、放火された野に取り残され、自から向かえ火を放って脱出する。履中記紀のイザホワケは、弟に放火された宮殿から脱出する。タケルの例を除けば、火は害を与えるもの、自分に敵対するものとして登場する。タケルと雄略のみは、火を自から操り、火を自分に味方するものとしている。古代の王者は、日常生活に欠くことのできない「火」を自由に支配したい欲望を持っていた。王者の理想に近い形は、タケルと雄略にみられる。ただしタケルの場合には、放火され焼き殺されようとする場面があり、火は敵対する性格と味方する性格の二重性を持つ。タケルよりも雄略の方が、よりいっそう古代の王者の理想に近い。雄略は人間として火を自在に操り、神として火に対応している姿はみえない。

次に雄略の水に関する記紀の記述をみ、その特質を考えておこう。

(A)雄略記 雄略がある時ミワ河の側を通ると、河で美女が洗濯をしていた。雄略はその美女の名を問い、やがて自分が召すから結婚しないようにとい置いて、宮に還った。美女は雄略の命令を守り、八〇歳を過ぎたが雄略からは音沙汰がなかった。美女は雄略の宮に出向き、そのことを告げた。雄略は長年の美女の貞節を

褒め、歌と多くの品物を与えた。

(B)雄略記 雄略は吉野宮に行幸したが、途中のヨシノ川のほとりで美女に出会った。後にふたたび吉野に行幸し、美女と会った場所をひき、美女に舞を舞わせ、歌を詠んだ。

(C)雄略記 雄略が宴を開いた時に、雄略に捧げる杯に木の葉が入ったのを知らずに、三重の采女がそのまま雄略に渡した。雄略は激怒し、采女を殺そうとしたが、采女が立派な歌を歌ったので、罪を許した。歌に「水（みな）こをろこをろに」という部分がある。

(D)雄略即位前紀 履中の子のミマミコはミワ君ムサを訪ねたが、途中に軍勢に妨げられて激戦となり、軍勢に捕らえられた。ミマは刑死するにさいし、側の井戸を指して「この水は、百姓のみ唯飲むことを得ん。王者は、独り飲むこと能わず」と呪詛した。

(A)の美女は、川の精・水の精と考えることができる。記紀神話では水の精の一種である海神の娘と結婚するヒコホデミと、その子ウガヤフキアヘズの神話がある。記のホムツワケも水神との婚姻が記される。雄略は水の精の美女と約束するだけで、結婚しないし、そのことによって別に罰を受けない。これは雄略が、水の精への完全な支配権を持っていることを示す。(B)の美女も水の精であり、それを自分の琴に合わせて舞わせている。これも雄略の水の精への完全な支配権を表わしている。(C)「こをろこをろ」は、イザナキとイザナミがアマノウキハシでヲノコロ島を造るさいの表現で、イザナキ・イザナミ同様に雄略が世界の創造者の立

場であることを示し、当然ながら水への支配権を持っていることを示す。(D)は、単独記事で具体的に軍勢が、雄略の軍であったとは明示されていないが、即位前紀の大略からみて、雄略軍と考えることができる。雄略の水への支配権が一部否定されているが、雄略のそれへの対応が記されていない。むしろ、ひとつの井戸水への呪詛など問題としない雄略像が描かれているともいえ、雄略は水支配に完全な自信を持っていることを示す。

神武紀では神武の兄二人が海神を鎮めるために海中に入る。ヤマトタケル説話では、海神を鎮めるために妃のオトタチバナヒメが海に入る。海の神、従って水の精は、その鎮魂のために犠牲を要求しており、水の精は加害者の位置にある。(A)・(B)では、水の精は雄略の被害者の役割である。火と雄略の関係と、水と雄略の関係は同一で、雄略は火の精・水の精に超越した支配力を持つ。雄略と鳥の関係をみよう。

(a)雄略記 雄略記(C)に続く部分に雄略の歌があるが、それに多数の鳥がみえる。「もししきの 大宮人は 鶉鳥 領布(ひれ)取り懸けて 鶉鵒(まなばしら) 尾行き合へ 庭雀 うずすまり居て 今日もかも 酒みづくらし 高光る 日の宮人 事の 語言(かたりごと)も 是(こ)をば」とある。

(b)雄略紀五年二月条 雄略が葛城山で狩をした時、雀ほどの大きな霊鳥が現われて、警戒せよと告げた。手負いの猪が飛び出し、人々を追ひ、雄略を食おうとした。雄略は弓で射ち、足で踏み殺した。

(c)雄略紀七年八月条 キビシモツミチ臣サキツヤは、小女を天皇とみたて、大女を自分とみたてて、戦わせた。またサキツヤは、小さい雄鳥を天皇の鳥とみたて、毛を抜き翼を切った上で、大きな雄鳥を自分の鳥とし、蹴爪を飾りたてて、戦わせた。

(d)雄略紀一〇年九月四日条 吳国の献上した鷺鳥二隻を持って、ムサ村主アヲらが筑紫に帰着した。ミヌマ君の犬、別伝ではツクシミネ県主ネマロの犬が、この鷺鳥を噛み殺した。ミヌマ君は、鴻一〇隻と養鳥人(とりかい)を献上し、罪を許してほしいと頼み、雄略は許すことにした。同年一〇月七日条には、ミヌマ君の献上した養鳥人らを、カル村とイハレ村に置いた、とある。

(e)雄略紀一一年五月一日条 近江国栗太郡から白い鶉がタナカミ浜にいたるとの報告があり、川瀬舎人を設定した。

(f)雄略紀一一年一〇月条 鳥官(とりのつかさ)の鳥が、菟田郡の人の犬に噛み殺された。雄略は怒って、その人の顔に入墨をして、鳥養部(とりかひべ)とした。この事件を宿直していた、信濃国の人と武蔵国の人が増にした。わが国の鳥の数は大変多く、積むと小さな墓くらいになる、それなのにひとつの鳥のせいで、人の顔に入墨をするとは、悪い王だ、と。雄略はそれを聞いて、その二人に鳥を集めさせたが、小さな墓のようにには集められなかった。雄略は二人を鳥養部とした。

(a)は、大宮人を鳥にたとえた歌であり、雄略と鳥の関係を示す史料とはしがたい。(f)も鳥が祥瑞とみなされたという史料にすぎない。(c)はサキツヤを主体とするもので、雄略が主体ではない。

鳥が靈鳥として、雄略を危機から防いだ(b)は、鳥が王者に関わるX説話の延長にある。(d)・(e)は、鳥養人・鳥養部の設定を示す。鳥に靈性を認めつつも、鳥を養う機構を設置する発想は、鳥の靈性を超越した人間の王者の発想である。火と水に対する雄略の姿と、鳥に対する雄略の姿は一致する。

雄略はX物語の主人公の三要素を兼備するというより、三要素の上に立つ王者の姿といえる。三要素に神としてではなく、人間の王者として自在に対応する雄略の姿は、人間としての理想の天皇像といえる。火・水・鳥は全く雄略に敵対する存在ではなくなっており、雄略はそれらを任意に支配することのできる人間の王者となっている。このことは、雄略の神に対する態度にも表現される。

記では雄略は、葛城山でヒトコトヌシ神に出会い、相手を神と知って、礼拝する。紀ではヒトコトヌシ神と一緒に狩を楽しむ、神を礼拝する記述はなく、逆に神が雄略をクメ川まで送ってくる。さらに紀では、雄略がミモロ岳(三輪山)の神の姿をみたいと望み、チヒサコベ連スガルに神を捕らえさせる。この話は記にはない。記がまだ雄略が神を畏れる存在であるとするのに、紀では雄略は神の上に立ちつつ、神とともにある存在となっている。紀では、雄略にいたって始めて、人間天皇の姿として出現する。いわば生身の天皇が始めて登場するわけで、生身の人間の天皇の始祖として雄略像は形成されている。神の系譜を引きつつ、神をまといつかせた始祖が神武であるとすれば、雄略は神をも支配する人

間天皇の始祖である。神武は神の顔をした天皇の始祖として造作され、雄略は人間の顔をした天皇の始祖として造作された。

しかし、雄略像はX物語を無視して、全く新たに構想されたものではなかった。清寧紀元年一〇月九日条には雄略を埋葬した時に、陵の側で隼人が食事もとらず大声で叫びつづけ、七日間たつて死んだので、雄略陵の北に墓を造って埋葬したとある。雄略記紀には隼人は登場せず、ここに突如登場するのは、雄略像と隼人に関係があることを示す。X物語には、副次要素として隼人が関与したことを考えれば、雄略像がX物語の影響を受けて成立していることは明らかである。また雄略紀元年三月是月条には、雄略は一夜で女を妊娠させたとある。これはホホデミの母が一夜で妊娠した説話の投影であり、X物語の骨組みの火中出生を雄略像は参考としていることを示す。さらに允恭紀七年二月一日条には、允恭が皇后の妹のところへ出かけるのを怨んだ皇后が、雄略を生んだ産室に火を放って死のうとしたとある。雄略に火中出生説話を配する意図があったことは、なによりも雄弁に雄略像がX物語を踏まえていることを物語っている。

X物語のもうひとつの骨組みの東征物語は、雄略にはどう反映しているであろうか。東征物語は安康記の雄略によるイチベオシハ王の殺害、雄略即位前紀に雄略によるイチベオシハ皇子の殺害がある。狩にかこつけてオシハを殺すが、その場所は現在の滋賀県愛知郡か蒲生郡とされ、雄略の宮の泊瀬からみれば、ほぼ北北東にあたる。泊瀬から行く道を想像すれば、いったんは東ないし

北東へ進み、北上するのであり、神武らの東征のルートは日向から北へ進み、瀬戸内海を東北または東に進み、さらに迂回して南方から北上することを考えれば、泊瀬から殺害地へのルートを東征とみることは無理な見方ではない。オシハは履中の従兄弟にあり、同族の殺害の条件をかなえる。

雄略の名のオホハツセワカタケは、「オホ」＝大・「ハツセ」

地名・「ワカ」＝若い・「タケ」＝力ある人で、どこにも固有の名とみられる中核がない。このような名は容易に造作できる。

X物語から直接に命名された名ではないが、ヤマトタケルの場合に類似例を求めることができる。タケルの場合には、X物語よりも付加された東西に支配を広げる姿が目立っており、これによって日本列島を指す「ヤマト」が発想され、「タケル」＝力ある人が付加されたと推定される。

人間的要素を重視して作り出された雄略には、到底目から軍事の先頭に立ち勇敢に振舞う像は付与できなかった。天智は百済侵略戦で軍事の先頭に立ち、天武は壬申の乱で軍事の先頭に立つような印象があるが、実際は居所を移す際の先頭にすぎず、現実の戦いの現場指揮者ではない。人間としての天皇には、そのような現場指揮は必要がない。むしろ宮殿を出ないことの方が望ましい。人間としての天皇は、いかに「タケ（ル）」であっても、宮殿の周辺のタケルであることが望ましい。現場指揮者のヤマトタケルは天皇の名でないこととの対比からいえば、宮殿周辺のタケル、オホハツセワカタケル（雄略）はまさに天皇の理想像を反映して

命名された。雄略の名のタケルには固有部分はなく、稲荷山鉄剣銘の「ワカタケル大王」は、たまたま雄略の名と一致したにすぎない。稲荷山古墳が五世紀後半の雄略の時代に相当しようが、「ワカタケル大王」は「若き勇者である大王」という尊称であって、固有名ではない。「ワカタケル」を立派な名とする考え方が、鉄剣を五世紀のものとすれば五世紀から記紀の編纂の八世紀初頭まで残存したことを示すにすぎない。

(三) 第一六代から第二五代までの

天皇系譜作製試論

雄略はX物語を踏まえてその上に立つものとして、人間の要素を重視した像として形成された。雄略は第二一代であり、武烈が第二五代であることは、五人の天皇を一組として天皇系譜が考えられたことを意味する。雄略の血統を五代続かせることは、現実の存在である欽明は父の代にその血統を打倒する形とならざるをえず、かかる革命の記述は避けねばならなかった。雄略の血統は分断する必要がある、雄略の子の清寧に男子がない形で血統を断つた。この組の最後の武烈も同様に処理された。武烈と清寧の間をつなぐために、兄弟の顕宗と仁賢が配され、武烈の父を仁賢とした。顕宗の名はヲケ、仁賢の名はオケで、「ヲ」＝小と「オ」＝大が対応しており、造作の色は濃いが、「ケ」は一字なのでいかようにも解釈できる。

説話に求めれば、二人が発見されたのは新築祝いの宴席であり、

食事を「ケ」というから、それにちなんだのかもしれない。その際の二人の仕事は火の番であり、火は木を燃やすから、木（き）の母音の交替した形の「ケ」かもしれない。この説話は記の歌謡にイザホワケの孫とあり、紀にもイザホワケの孫を強調する記述があって、イザホワケの「ホ」＝火から火の番が発想されており、事実を反映したものではない。二人の父がオシハであることから、別の考えができるが後述することにする。「ケ」は気配（けはい）であり、雰囲気のような意味もあるから、ぼんやりとした存在の意味で「ケ」と命名されたのかもしれない。とにかく、人間の要素を強調した天皇像は、神から人間天皇への変化が必要である以上、どこかに配置しなければならず、五人一組の最後の組の初代に配置し、後への影響から血統は男系ではつながらないものとされた。

五人一組の五は、適当な数にすぎないのではなく、年や日の表現に干支を用いた古代知識人にとっては、五行思想の基本数の五であり、十干に配当される基本数でもあって、重要な数であった。

五人一組を五重ねたのが、武烈以前の天皇群の人数であり、武烈を二五代とする基本はそう考えられる。

五人を一組とすれば、雄略の前の組は仁徳・履中・反正・允恭・安康となる。安康の名はアナホで、アナホは「アナ」は（ああ、という）感嘆の語・「ホ」＝火であり、「ああ、火」という意味となる。安康記紀には火・水・鳥の要素はなく、名のみが火から発想されているのは、安康が派生的に作られた天皇であるこ

とを示す。この組の五人の特色は、この組の初代の仁徳の紀にうかがえる（記は雄略の場合にもそうであったが、紀ほどには天皇の性格を明確に記さない）。

応神記と仁徳即位前紀には、仁徳が異母兄弟のオホヤマモリを殺す話がある。仁徳は船頭に化けて船を覆してオホヤマモリを殺すが、水を使ってオホヤマモリを殺したことになる、仁徳は水の精の性格を持つことがわかる。仁徳紀には茨田堤の造宮記事があり、河神が人柱の犠牲を仁徳に要求する。仁徳は河神の要求に合致した二人の人間を探し、人柱とするが、そのうちの一人は河神と智恵くらべをして、人柱となることをのがれる。仁徳には水の精の性格があるのだから、仁徳が直接に河神を鎮めればよい。そうならないのは、仁徳の持つ神的な性格を背後に隠し、人間の性格を出そうとしたためといえる。神と人間が共存し、互いに同列で存在することが、この組の天皇の特色といえる。履中紀では神が祟り妃が死去するが、それは神に与えた人間を、他の人間が奪ったことへの祟りとする。人間と神は同格で存在する。反正紀にはほとんど記事がなく、例証できない。

仁徳・履中・反正は三者でX物語の諸様相を充足することは、別稿に述べた。残る二天皇を創作すれば、この組の五人が揃う。アナホ（安康）が「火」の要素を名として、二次的に造作された。残るのは水か鳥である。仁徳・履中・反正と天皇位を継承するから、水の要素の反正の次には鳥が望ましい。履中の子には紀では同母のイハサカイチベオシハ皇子・飯豊皇女・ミマ皇子がある。

記ではイチベオシハ王・ミマ王・青海（アヲミ）郎女またの名を飯豊郎女がある。飯豊の名は大系本記にイヒトヨ、紀にイヒドヨとし、大系本の紀の頭注にイヒドヨは鳥の「ふくろう」とする。イヒドヨは顕宗即位前紀の分注には、「譜第」という本にはオシハの娘とあるが、いずれにせよオシハとイヒドヨは一括して扱われる要素があった。

イヒドヨは同紀に忍海角刺宮に「臨朝秉政（みかどまつりごと）」したとあり、天皇位についた記載がある。清寧記にも天皇位についたことをうかがわせる記載がある。これらのことは、イヒドヨ女帝の追放が急ぎよのものであったことをうかがわせる。

反正（水の要素）からイヒドヨ（鳥の要素）へ、イヒドヨからアナホ（火の要素）という皇位継承が想定されたことがあったと推定される。またオシハは記では名の由来を「齒」に求め、紀にも「齒」に特色があったとする。「齒」から名を説明されるのは、他にはミツハワケ（反正）の例があり、ミツハワケとオシハは同一発想により命名されたと推定され、オシハには水の要素が配分される予定であったといえる。なお、オシハの子とされたオケ・ヨケはこれから考えると、火の要素が配分される予定であったかもしれない。「火の氣」＝「ホのケ」＝「ホケ」からオケ・ヨケが作り出されたのかもしれない。それはともかくとして、オシハと一括されたイヒドヨが天皇位となったので、オシハの水の要素は捨てられ、雄略に殺される役割が与えられた。イヒドヨが女帝であるのは、この前の組の第四代に神功女帝を準備していたことによる。

ただしイヒドヨが女帝の位置を奪われると同時に、神功も女帝の位置を奪われた。

大宝元年（七〇一）文武天皇と藤原宮子の間に男子（聖武）が誕生すると、藤原不比等はその子の即位を万全のものとするために、女帝は臨時の中継ぎにすぎないとの歴史観を強制した。記録に残っている推古や皇極（斉明）にも、中継ぎの役割に合致するように記述を整理したとみられる。記紀の空想上の天皇たちからは、女帝は省かれた。イヒドヨは天皇の位置を失われ、代わって允恭が挿入された。允恭記紀を検討する紙幅の余裕はないが、藤原の名の初登場すること、中臣氏が活躍することなど、允恭には不比等の意向が反映している。⁶⁶ 允恭の名はヲアサツマワクゴスクネで、前後に類がなく、スクネは天武の諡号の一部のマヒトに対応するなどのことも、允恭の異例さの表われといえる。

アナホ（安康）の名は少し異例で、履中はオホエの地名を名の一部として表記することがあり、反正もタチヒの地名を名の一部として表記することがある。アナホにはそのような表記法は一例もない。アナホと好対象なのがオホクサカで、クサカの地名に「オホ」＝大を付しただけの名以外にない。記はオホクサカをハタビノ大郎子のまたの名とするが、オホクサカハタビノと記す例はなく、ハタビノはハタヒノでハタ・ヒノのふたつの地名の可能性もある。ちなみにイハサカイチベオシハは、イハサカとイチベの二地名を持つ。オホクサカアナホとなれば、名としての要素を完備する。

安康記紀には、アナホ（安康）は雄略とオホクサカの妹を結婚させようとしたが、使者として派遣した臣下の虚偽の報告を信じ、オホクサカを殺し、オホクサカの妻を自分の皇后とする。妻の共有は、両者の同一性の傍証としうる。皇后とオホクサカの間に生まれていたマヨワを宮中に育てるが、アナホはマヨワに殺される。妻を共有しても差し支えないが、安康の妃はこの皇后以外になく、安康の血統は断絶することになる。これは安康が仁徳に始まる組の最終の天皇であり、この組の天皇群の特色である神と人間の共存を終了させる目的によるとみられる。

安康が他人に殺されるのでは、天皇が殺されることが強調され、具合いが悪い。誤解にせよ親を殺した安康を、親を殺された息子が仇討ちをするストーリーによって安康の時代を終了させることが、案出された。一人物であったオホクサカアナホを、オホクサカとアナホに二分し二人物として配置し、目的を達成した。オホクサカは仁徳の子に、アナホは允恭の子に配されており、オホクサカの妻は世代からいえば、アナホの母の世代に相当する。これは允恭の挿入によるもので、本来はアナホも仁徳の子として配置されていたであろう。

雄略はオホクサカの妹を皇后としており、世代からみて、やはり仁徳の子が原位置であった。イヒドヨも允恭の位置、つまり仁徳の子の位置にあったと推定される。兄弟間の相続を正当化する必要は、天智から天武への継承の場合であり、その時期にこのような原位置の系譜が作製された。文武から聖武への継承を考える

と、親子関係が基本となることになり、允恭が挿入されると、允恭の子として安康と雄略の位置が変更され、イヒドヨの位置も履中の子に変更されたと推定できる。

(四) 初代から第一五代までの

天皇系譜作製過程試論

初代神武から第一五代応神までの天皇群は、神の要素を次第に減少させて行く天皇群と考えられる。神武は東征事業も、神の援助に頼って成功することをみれば、神に対して全面的に依拠する天皇と想定された。応神は、ケヒ大神と名を取り替える話を持つが、ケヒ大神のもとへ参拝する形であり、まだ神が力を發揮している。履中と神の話は上にみたが、筑紫の神が履中の狩をしている淡路まで、さらにヤマトまでやってきて崇る。応神と履中の差は明瞭といえる。神武の神の要素を一〇〇とすれば、仁徳の組では五〇になり、雄略の組では僅かに残るといえる。

応神までの一六代は第一〇代崇神以前と、第一代垂仁以後に大別できる。神に全面的に依拠する神武を受ける形で、神祭りの天皇として発想されたのが崇神である。崇神の名のミマキイリビコイニエは、紀では地名のミマナ（任那）からミマを説明するが、他の多くの場合と同様に二次的な説明にすぎない。ミマキには聖木説や墳墓説もあるが、むしろ神祭りの天皇として想定された性格から、神祭りに欠かせない「御酒（みき）」の「ミ」に真（本当の）「マ」を付加してミマキの名が発想されたと推定される。

イリビコは既に指摘のあるように、男性司祭者であろう。ちなみにイニエは、「数多くの珠（を持ち）真実を判断する精神作用（「霊」の意味であろう。神武と崇神の間は神性を次第に薄めて行く期間として、物語のない八人の天皇群が用意された。八人の名については、水野などの説に付加することはない。

ホムツワケは当初は天皇予定者であつただろうが、神武像が形成されるとその繰り返しになるので、皇子の位置に置かれた。ホムツワケが本来持っていた別名イザサワケ（ホムツワケの別名ホムタワケ（応神）の別名）の説話に登場するイザチ（応神と敵対するオシクマ王の將軍の紀での名）を、父として第一代垂仁とした。垂仁の名はイクメイリビコイサチであるが、記には垂仁の同母弟にイザノマワカ（紀ではヒコイサチ）があり、イサとイザは通用し、イクメイリビコイサチとできる。イクメイリビコイサチのイクメは、サホビコ・サホビメの反乱の序章部分に垂仁が夢をみる話があり、その夢（イメ）による。イメはイ||寝る・メ||目で、それでは眠っていることになるので、イク||生きているまたは靈力に満ちている・メ||目とした。イリビコは男性司祭者、イザチは「（いざ、と）誘う霊」の意味であろう。イザチ（垂仁）はホムツワケから派生しているので、付すべき物語がなく、崇神の神祭りの性格を分け持つものとされた。

垂仁は第三組の初代でもあるから、神を受ける司祭者的性格でよかった。むしろ先に第三組の初代の性格を司祭者的なものと想定し、イザチ（垂仁）をこの位置に配置したのである。垂仁の

子としてホムツワケは、本来は第一二代天皇に予定されていたが、上述の神武との関連や、現実には火中出生は不可能であることなどから、皇子の位置に置かれ、代わって異母兄弟の景行が天皇の位置に配された。景行も付すべき物語がなく、景行紀ではヤマトタケルの事績と同様の事績を付与され、景行記では独自の物語を持たない。

ヤマトタケルもホムツワケの子として、第一三代天皇に予定されていたであろう。ホムツワケが皇子の地位に配されると、それにつれてタケルも皇子の位置に配された。ホムツワケと同じような性格を持つタケルは、それと同時にホムツワケの子の位置ではなく、景行の子とされた。タケルの代わりには、やはり異母兄弟の成務が配された。景行の名はオホタラシヒコオシロワケで、成務の名はワカタラシヒコという。オシロワケは大系本頭注には力で支配する意味とあるが、ワカタラシヒコにはこれと対応する名の部分がない。ワカタラシヒコとタケルの交代の方が、オシロワケとホムツワケの交代よりも、後に起こったためであろう。

タケルは白鳥への変身をみれば明らかのように、火・水・鳥の三要素のなかでは、鳥の要素が強調されている。タケルは鳥であるから、タケル（と交代した成務）の後の二代は水と火の要素を強調した天皇が想定された。現在の記紀ではタケルの子の仲哀が成務を継ぐが、仲哀記紀の仲哀は神罰を受けて死亡する存在で、本来は天皇の位置にあつたものではない。神功記紀は神功の新羅侵略に海中の魚や風や波が援助したとあり、「水のミコ」の性格

が強い。神功女帝が仲哀の位置にあったが、既述のように女帝を認めない歴史観によって、天皇の位置を否定された。神功が女帝であるのは、斉明女帝期の六六一年に始まる百済侵略戦争の影響で、神功が新羅に勝利する物語は、六六三年の新羅による日本の敗北を意識したために違いない。このような政治的作爲は、二次的に加えられたもので、本来の「水のミコ」像は神功女帝の物語とは違うと推定できる。

仲哀の異母弟に記のアシカガミワケ、紀のアシカミカミワケがある。仲哀紀ではカミミワケは仲哀に献上される白鳥を奪ったために、仲哀に殺される。その際にカミミワケは焼けば白鳥も黒鳥となるといったとあり、火の性格が配されている。アシカミはアシカビで葦の芽、カミミは蒲の芽で、水辺の植物の発芽を示すと同時に、アシカビから神が誕生した神話を連想させる。アシカガミは、水辺の葦と神の象徴の鏡を連想させる。いずれも神を連想させ、水を連想させる。水の要素がカミミワケに配されていたと、推定してよからう。紀の白鳥をめぐる話は、鳥の要素である。

カミミワケの原物語は推定すべくもない（紀ではホムツワケに配される水の要素と隼人の関与が少なく、本来はカミミワケにその部分が分与されており、仲哀の熊襲制圧物語や神功の航海の物語を結合させたものかもしれない）が、タケルを継承する予定者は、水の神にゆかりのあるカミミワケとみてよい。なお、記にカガミワケⅡカミミワケは石代別の祖とあり、石代は石城とも磐城

とも表記しうる。景行紀には景行の妃に、三尾氏（ミヲウジ）磐城別（イハキワケ）の妹の水齒（ミツハ）郎媛がある。ミヲは水脈（水の流れ）であり、ミツハは水を表わす。カミミワケがいに深く水と関係するかがわかる。

タケルからカミミワケへの天皇位の継承が予定されていたが、政治的配慮から新羅を服属させた女王の登場が必要となった。神功がオキナガラシヒメの名を持つのは、既に知られているように、息長氏の関与といえる。タラシ系の名が本来の位置ではなく、代理に位置を占めた景行・成務・神功に一括して付与された。女帝の否定というさらに加わった政治的配慮により、神功に配偶者を配し、それを天皇とした。仲哀天皇の誕生であるが、仲哀に新羅制圧の物語を付与すれば、同じ男帝である天智の対新羅戦争の敗北を強調する結果となる。対新羅戦争の敗北はあくまで斉明女帝の失敗であることを強調し、聖君天智像を守る必要がある。女帝の存在は否定されねばならないし、対新羅戦争は昔も今も女帝によるものとしなければならない。神功が皇后のまま異例ではあるが、対新羅戦争の主導者として記紀に残された理由であろう。

神功の新羅侵略の功績を記紀に残さざるをえなかったため、その配偶者として構想された仲哀は対新羅戦争を實行しなかった罪で、神により殺されることとした。天智が途中で対新羅戦争を放棄していれば、神罰が下るだろうことを認識させ、天智による敗北は仕方がないことと考えさせようとする意向がみられる。

オキナガラシヒメ（神功）の名が記紀に残ったので、仲哀に

はタラシナカツヒコの名が与えられた。ナカツは「中の」という意味であるから、オキナガタラシヒメの存在がなければ、オホタラシヒコ（景行）とワカタラシヒコ（成務）の間に位置し、ワカタラシヒコと名を取り替える必要がある。神功は天皇ではないから、天皇の名としてのタラシを考えれば、実際はワカタラシヒコと名を交換すべきである。そうならない点からも、仲哀の構想は、オホタラシ（景行）・ワカタラシ（成務）・オキナガタラシ（神功）の名の付与よりも、後の時点に成立したといえる。既にイヒドヨ女帝の追放が急ぎであったことは述べたが、タラシナカツの名がタラシ系天皇とタラシ系皇后の間を示すナカツであり、本格的命名とみなしがたいことも、女帝の追放が急に行なわれたことがうかがえる。

ホムツワケとホムタワケ（応神）の関係は、既に別稿の紹介のなかで述べた。ホムタワケは「火のミコ」として、派生的に作り出された。なお、初代神武から第一五代応神までが記の中巻であることは、この一五人の天皇群がひとつの特性を持つことを、示していると考えられる。

原形としての第一一代から第一五代の天皇を考えると、イザチ（垂仁）ーイザサワケ（ホムツワケ）ーヤマトケルーアシカミカミワケーホムタワケ（応神）が当初の構想で、それがイザチ（垂仁）ーオシロワケ（景行）ータケルーカミミワケーホムタワケ（応神）となり、さらにイザチ（垂仁）ーオホタラシヒコ（景行）ーワカタラシヒコ（成務）ーオキナガタラシ

ヒメ（神功）ーホムタワケ（応神）となり、最終的に神功とタラシナカツヒコ（仲哀）が交代したと推定できる。

まとめにかえて

第二五代武烈以前の記紀は、五行思想の基本数五を五重ねた人数として想定され、X物語から次々と主要天皇を作り出し、配置したとの仮説に基づき、その具体相を考察した。もとより本稿も仮説であり、別の仮説も形成できよう。しかし、武烈以前の記紀には正しい批判さえ加えれば、なんらかの史実がうかがえるという従来の発想は、根底から疑われるべきである。このことだけは、別稿ならびに本稿の仮説が間違っているとしても、両稿の提起した課題であり成果であるといえる。

この問題提起は、改新否定論の提起した課題の延長線上に位置するともいえる。しかし、改新否定論が具体的方法では紀の記事同士を対比し批判するのは質的に異なり、文字記録の僅少な五世紀以前に適用する場合には、すべてがまったく史実を含まない虚構である可能性に立脚して記紀を検討することの必要性を提起した点では、独自性があると主張することが許されよう。

本稿の「はじめに」の部分でも触れたが、文字記録として系譜が残されるのは、推古の場合以降と推定できる。推古の父として記録されていた欽明には、父と母が必要であった。推古の父の欽明は、推古の父にふさわしく造作された可能性が強い。推古の兄弟たちもまた、そう想定できる。欽明の父として想定されたのが

継体であるとすれば、継体像もまたそれにふさわしく創造された。とすれば、継体の越前または近江出自も再検討の必要がある。継体の妃に尾張連氏があるのは、紀にヒコホホデミと同じく火中に出生したホアカリが尾張連氏の始祖とあることと関係するし、継体の妃に三尾角折（ミヲツノヲリ）君や三尾（ミヲ）君があるのは、ミヲが水の流れを意味することと関係するともいえる。火・水はX物語の主人公の要素であった。継体から崇峻にいたる天皇群は、このことや崇峻に記がワカサザキの名を与えていることなどを考えれば、抜本的な再検討が必要であろう。

注

- (1) 水野祐『日本古代王朝史論序説』（小宮山書店・一九五四年）・同『日本古代の国家形成』（講談社・一九六七年）・同『大和の政権』（教育社・一九七七年）
- (2) 前之園亮一『古代王朝交替説批判』（吉川弘文館・一九八六年）
- (3) 拙稿「五世紀代二人物の実在性について―葛城襲津彦と雄略天皇―」（追手門学院大学文学部紀要一七号・一九八二年）に筆者の鉄剣銘についての考えを示した。また、関和彦「稲荷山古墳出土鉄剣と継体欽明朝の内乱」（共立女子第二高校研究論集一号・一九七八年）に「ワカタケル大王」欽明説があるというが、筆者未見。
- (4) 星野良作『研究史・神武天皇』（吉川弘文館・一九八〇年）
- (5) 別稿は他誌に投稿したが採否未定で、採用されない場合、また本稿の方が先に刊行される場合を予測し、やや詳しく紹介した。
- (6) 拙稿「允恭天皇の実在性について」（同前紀要二二号・一九八八年）